SY
21

序

俳諧の書いふ〳〵より ゆゑ〻〻を以て
ゆゑを附合乃意味をとゝのへ書籍のうへ
ゆゑいわきまへうるものをしらしめ
俳徒の人〻〻會し席をこのゆゑに
議論をもつまびらかにして俳
自得効ゆゑ〻〻俳諧を紹へなし

さしと不学にして受とへる人を仏
法まで自己の誤を正しの役なく却て
他の癖論惑説をもつて病を作る乃其人
あるまでよりさ師をえらぶにはたらく京洛
俳諧をまなぶ人自然と発句作法乃ふ
あるべしの凡発句ハ師を求むる心に
師とし造化を友とし独立する能ハ

又附合と申ス事ハ古へハ連哥の
法式を擬しくさいのい俳ツ作しる式
古風乃格調ゝ次第に芭蕉翁ハ其その
縄墨をとり形まで俳諧の附合と申ものに
ハ連哥興まりさい上古乃連哥ゝ髪髪とて
かの古風のさいのいハ形遠をるかまで多く
近世芭蕉門乃附合世ハ行ハ少くと

支流まちまちに門戸を建己が好み所に
是とし其好むところ一概にして或はみな
一栗をもて向上乃一路とし或は
歳俳をもて老成乃いとなみとし其の意旨
虔々をもて謂つべし然も大概蕉翁
一世の集を鑒として倣ふものと
なすも其規則とすべき十七條廿五ヶ條

或は七名八体やむやの関名の手によりて
学ぶべきを墨守の練磨乃泣揚子の
岐路に迷ふの徒あるべし故ふこの挙
ふ乃ふ今や此篇現在の作者八句をもて
古来の名目に引用し又をみりの
作者もまた添へ句を以て連珠
乃趣を志す一加ふるに古人乃句を以て

とを適意と今[illegible]ものをそこなしを用ユ
ゆゆしく社中乃初心輩に附句乃心得[illegible]
永[illegible]めゆゆしく他門ニ向テ論[illegible]
うらやましいかゆ

秋半亭几董稿

古来名目 并私説

○発句 天　○股 地　○才三 人

○発句 起　○股 兼　○才三 轉

○才四 合

○発句 客　○股 主　○才三 相伴

○才四 庖丁

私說

○發句 有心 ○股 有心 ○才三 會釈

○才四 逃句

○發句 景氣 或向 ○股 景氣 或向 ○才三 人情 或手前

○才四 人情 或手前

○發句 人情 或自 ○股 景氣 或他 ○才三 景氣 或他

○才四 人情 或自 ○才五 人情 或自

○發句 景氣 或用 ○股 起情 或体用 ○才三 人情 或体

○才四 景氣 或体用 ○才五 起情 或体

右

古来名目 五服

○相對　○比　○對

○打添　○打着

同　附物趣向新古之差別

○凉　川端　古　拭椽　中古　鶴脚　新

○暑　小松原　同　絲縮緬　同　篭就鳥　同

○寒　醉醒　同　竈塗壺　同　塩鯛歯　同

古人曰

一物〳〵に服は韻字留字なる法なれども

發句ふりてそもふるまつ事なれども

まかりなる發句ふりなれば山川艸木

多數乃彩ひをまて發句の景情を始を

ちなるべし

古人曰

一服は字留にてもいふは是も歌一首乃

ごとく一句詮さてんらめと然ともよく番ヒ

く一首のこゝろをめるを脇の姿とふく

粉はしたゝをもとゝ

古人曰

一句之ハ発句ニ用ひるを平句ニ用ひるを

一句乃仕立ニ別あるゆへ可引合

歌　はしの四ツ乃手本を定ること

古人曰

一句之の前ニ文字の定るを一句のさはり

変句乃やうなれとも下のことをあ所おく

次乃句へ及けるを事めく此理をゝる時ハ

ての字　歌の字ゝ用ひるを初ニ

されと此句を句之のさはりと百句の中ニ

ゝるくも撰出ひたるの句之ゝ句を

ゝるゝ句を八やうにまわしるを為ること

世々事之の韻字ワ留ル仕受ケノ如ク
或ハ初橋 或ハ杜鵑を切るしを押字
抱字多結法あるハ古人乃推量

私説

発句ハ起ル公服ハ兼ル二句首尾し
ゑ一ゑ乃体みゑ一句の詮を立るなり
されとワキの留も韻字を示案て

抱ゑ尾調を服の法ゑ結を
事之ゑ案又あゑめて句を起を承を
既ワキと以ハ前句ハ切又表句ゑふ
歩越しゑゑ一軸しゑ意のハゑ
ゆゑぬやゑにし志ゑも発句服ゑ二句
ゑ尾調ひゑゑへを附出しゆく而ゑ
且事之ゑりして沼乗くと連絡ゑる

ゝ絶たれた為り乃文字に意味あり
さきハ外三の句を一書のむつの記所
ゝゝゝゝゝ勿論ワキ外之乃仕法をもく
熟得すきハ附句ハ百句も千句も進ム
程なる事ハ一ゝ句ゝを脇ゝゝ
ゝ之あ一書ハ一書ゝゝ調ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ二句乃附

ゝゝをよく得ゝて附句の自在を
得るなるべし

古来八体之名目

○寄　○志　○観相　○打返し
○欺　○前句乃情を押出す句
○詞をとる句　○意氣
同　案方七名

○有心　○向附　○起情　○會尺
○迯句　○拍子　○色立
同　附方八體
○其人　○其塲　○其時　○天相
○觀相　○時分　○時節　○面影
同　三体
○有心　○會釋　○迯句

同　取響音五字
○伊　○感　○香
○移　○働
同　八句之運
○見〻　○聞〻　○思〻
○行〻

私説

一前ゝ自他体用人情景氣のかつちをまて
発句より第四第五句乃至一巻乃
連綿四五句乃運ひ歩法をもてよくかつ
乃至ちかつ或ハ巻中人情乃句をもて
景氣乃句を接ぎ又ハ景氣乃句を
りて人情の句を挿ミなるかつ乃

至を信ゝ親ハ初ハ初ハ初て禁忌
ハ人情二句景氣二句と續
筋を織ゝ一巻連綿する事
あり一巻中ハ人情ハ景氣乃句出て
ゝ曲節ハ景氣乃句出て
是非二句對ゝ次ゝ人情起情の句出
待ゝ二句を信ゝ延法ハ又

人情二句第一を次三句第二とする時ハ彼
向附乃法を以て自他をうち移人事
四句を五句を續け四くへ〜さくと乃
曲の節を用ひきん八一巻の眼目とする而
なきに似たるを既古集と人情五六句
結ぶ〜るを考へ入るべし

又曰

景象の句〜〜を見聞思行乃文字
あるハ是人事を拘〜〜ふくまこしと
品物るを古句みるよりくるを花
ゆるひ〜〜きを次〜ふ句みを見聞を
留〜るハ新〜古〜〜を以集世て
附合穿鑿論乃落く一巻の調子を
〜〜句乃情ハ作者乃意

あり景氣と又ゆる句と情の句の事
情と見ゆる句と京の句なると云ふ所に
よく見解して編まくさきのたとへ
首物語双紙の物なる地の詞といふなる
をもて志賀の陪合乃一事ハ能物語
をよそをして綴ること心ばへきもまた一助
なるべし

右小筆乃私説乃ハ古人の糟粕乃
しるすあるふ事ハ拙乃功ハ
尤記ときろハあり知る古事ハ
名目ハ略して句を引き解きるに要話を
もてし歌を仮名を加へて書ラ初心
手引乃要とも侍を俳諧練達乃

人出家者の心ばせ初学者
孫の法乃まめふいさ〻の位あ〻むる
仏ふのこゝ〻を他見せかゝを此
詞をもて全編乃意をさ〻〻まへ
かゝ〻ゝ〻さとりかもの

発句よりワキ付る事
春の羽もうゝ法くらひぬ初時雨
ひとふさ風のオ系ふ川まる
発句初しくれハ影ふかく春〻雨の長
かゝ〻ゝ〻枝うゝ法くろふ羽とき〻う句位
ワキハ
初時雨一ふ風く付く枝本葉ふ

ゆうべの雪くの結ひみく志ゐまるせしゝ
うゐ法くらつてゝ雪たるせく一白世界く

是ゝ手添と紙ふ服く

市中ハ物のまひ夜の自

暑ゝ〳〵と門くの声

発句ハ夜乃自ゝ影く市中ゝ越向みゝく
物のあらひときゝ越向く影乃自ゝ出ル

ちらゝ〳〵むきひるの白紙く

服ハ

暑ゝ〳〵と門くの夜乃ゝ越ゝ障ゝる自ゝ
二句ハ前ゝ句の事ゝ板市中ゝ門く
ゝ障ゝ事ゝ声ハ物のあらひと門人ゝ
射ゝて障紙むすひまるく

是其場ゝ

屠蘇酒の事ハ元日ニ出す

酒志の習ふこの古ろ出る自

什叟句ハ源川乃おと絵して接穂乃

匂ふ花ニワキも接穂のワキとなりハ

獨ふ花のときのよいを本なり枕解ハ

此比おもしに夢屠蘇ねなるまて源川

ふの静なる絵董ふまくきけて

かくひくおもろいくこと

うけてワキは日ころハ酒を志めるなぐく

いの事を主ふりハ此おもわと遠事の形象

更此絵ハ源をすめるの形もちと

ふくふふ助字乃自ふふく

重ね事めふいしらふと物ふく自乃和

古ふな絵を助字のふふもひふま

発句は屠られむとする

是相對なる脇

菜の葉に月を洗へる雪

山もとをしく踏かため

はつ口キハ只粉骨（フンコツ）もなん句のやうにたゞぬ人ハ

おなじ句形なれども教句を玉拔かるゝ

とハキこ自を赤と日を西ゝとゝふゝハ

夏の書ハ日は九七ツ時ゝとはゝ絶十日

はゝゝゝく自も西はゝゝ出くあ数

をゝゝゝ西ゝ一めんゝ菜ねの出はゝて

おゝゝのもゝ形ゝ言葉ゝゝ西ゝあゝと

同弟（カウベヲメノラス）ゝ面ゝのゝゝワキゝゝの字を用ひゝゝ

手拭ゝゝゝ書ゝや一句を東西とゝんやゝと

ゝ紅葉は山もゝ附ゝかゞゝハ葉乃
色のゆゝらしゝ
是も赤添みゝく時分附ゝ

牡丹葉ゝ赤ゝ色ゆゝ紅ゆゝぬ二三片

和月廿日乃ありのゝ彩
発句ハ牡丹乃濃美なる彩を俳とゝゝ

やゝ枯ゝゆゝる花の二三ゝ三ゝ三ゝ落葉
を赤ゝ色ゆゝぬゝゝの俳ゝ二三片とゝゝ
ゝ多ゝ試きゝゝハ題の牡丹ゝ赤ゝ色ゆゝ
彩向ゝ　ワキハ
その時節を定ゝゝ和月乃廿日比
ゝの発句の見めゝゝゝゝの影ゝ文
時分を定めゝ牡丹のゝへゝ赤ゝ

ちらくとうてみる月の影のうるハ
きうちんこの事のさるうるやうるを見を
牡丹ゝ世日草とふふ美ゐうのうたよりく
世日とさうめうちうんを出ワキ大キーふ
句位を減もまもまもしじゃて
是お着ふふ脇うく附を其時こ

行を枝ぬふ雪の表絡れ
我なくまもまもの人の声を
発句ハひさきうよ降つる雪の表ち歩
紅体こさきのふのゆき労をくおを
イてうれハいをくく降まるる地を
立体ひもあくを又ウ表くりんるる
さ海こ言の表ちとうくう趣四く形とふ

字が一句乃眼目(マナコ)じゃ　ワキハ

ゆもイもワきなれ大雪のあるこゝろハ

我をうゝとゝくゝ又なのとゝろもまゝ人ゝ

ゝてゝさてゝも雪ゝあゝ雪ゝじゃとまつふゝゝ

あゝのいゝのゝゝとゝ雪ゝゝゝゝゝゝゝと蛙(カイ)を記ゝゝ

句ゝあゝ春ハ生声ゝゝゝゝけゝゝゝの下墨ゝワキを

字面ゝゝゝゝゝゝゝを詞の続ゝゝゝゝゝゝ

ゝ句ゝゝゝゝゝゝゝゝを詞をおゝゝれと

ゝのゝゝ面ゝゝゝれを詞ゝかゝゝゝ二句

ゝゝ尾ゝゝゝ濃ゝゝ是等をゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ合点ゝゝゝゝゝゝゝ

是も相對乃ワキゝゝゝ附ハ有心ゝ

ゝゝゝゝゝ月骨髄(コツズイ)ゝ入ゝゝ

蚊句老杜ゥ家多腸

義句ハ自然光りのさるとも所ゥらるる
枯ゥ木枯ゥ枯ゥ木乃枯ゥくくとひゥる
なるゆ趣向ゥて自のひゥるる骨角
ゥ志むやゥ邪ゥ枯ゥやとゥを自ゥ骨
骸ゥ透ゥ骨ゥ形ゥ体ゥ

ワキハ

ゥのゥねのゥうに義句乃系ゥを情ゥ
ゥゥゥふおゥゥく一句ゥ風骨ゥ杜子美乃
俗ゥ詩ゥ乃ゥ発句ゥ称ゥ骨ゥ
ワキの趣向ゥ主ゥ骨ゥゥゥゥゥを老杜ゥ
詩腸ゥ季節乃含ゥ入ゥ志ゥゥものゥや
是等ゥ格ゥのワキまゥく技能のゥへゥて
ゥ杜ゥもひゥゥゥとゥ

次韻乃俳諧

諸の足雑脛(キヤク)長く継(ツギ)て

這句(コノモツテ)以(ニ)荘子(ソウシ)可(シ)見(ミル)矣

ながらを作例ふ〜るまことのそ

一或ハ古人の発句をとる照より附ちめて

もとる仏諧うある抜し仏照起りといふこ

花の頃ほひあるこ五日ある　古人

そ乃花見さる袖の春雨

此発句ハこそ花ハこと〜く落て仕ふこ

よまこ〜ちまこ四五日もまたあるう此を表

四月よ発ほ〜くもあいぐハどのやうなる風ほく

ひらあやこと〜花のうふほ〜ふ花ほ〜てこを浦く

おくもひ時を〜う一句の趣向ほ〜り五日こふふ

物ゝ行も理屈ハ中ゝ
ワキハ云ふ事ハ云ふ
とゝ逢ふ人を
とゝ思ふんぢやうなこと
ハいふ事ハ及ばぬ
あれかうと思ふてみてゝ
ふんを指揮
ゝ中ゝ云ふ所ハ及ばぬ又日
ゝ未ゝを以ゝ物を
思ふゝ花とさへ我ハ人さへと感懐

を部ゝ今さら神をあらぬ斗ゝやと歎
く神の事面と結ぶ事ものゝ花と云ふ字
春ゝ字義句ゝ中あるとわぶと服ふも
その二字をきゝ〳〵拵髪乃体と
されとゝ行ふゝ服装の白ゝハ義句ゝ
あゝ字を用ゝいつまハ行ゝ及ぶ所ハ
乃人とゝ古人とゝの方ちをうくゝ行ゝくワキを

心してきゝ事

又夢想の句なとゝ記すくゝ夢ホ又ハ句を

神祇とゝ云くゝ下ろう御乃字を出ろ仮名

枕ワキを夢想のぬ〜〜〜〜〜〜〜次〜〜を

つゝ書くゆゝ〜〜〜〜〜〜是ハ心字ハ清ぬ

いつハなけきても発句を神の句と心ゆく

ワキはまこと心用ひく仮名そゝく是も

先ワキ起り同前ゝ又夢想祝言奉納の

ゝ〜ハ発句乃留りよりワキ乃仮字ホ

五音相通十韻連声など用ひく附ル

事ハ主唱の宗匠乃意ハ仮名よいゝ

発句脇ハ第三附ろ事

意歌やはらゝハ歌ハ心ハ意を

言をのてなゝ和すゝ乃松

海士乃子ろ錦を岩ろ見吹て

発句ハ炉辺ニて旅人をもてなす体なるニ
ワキ寸法遠く座のあるじを附きまわ
枕寸三ハその二句ニ向ハして縁を告る
貝を吹きの字ゆゑ能ち事と新
て前乃句を海辺乃旅泊と見返て附
しやかうと事に起りてゆくゑ
物して来るこ

是向附こ

赤のもくしけも鯵をけちかゝ
西日乃ともくるよさ天きまこ
旅人乃風ゝなる色く事者こく
発句ハ景乃ともく梅ひく汁ともく脇
ともくこ京毛紙賞歎しこみ寸法遠く
西日も周ともく形ゝを定こく流しこ

ワキ　久方の光りのどけき春の日
しづこころなく花の散らん

しづこころを照し合せて見ハいよ〳〵
おもしろし扨又ハ西日にいひ出したる
たゞ風と時節とを起して旅人と云う
発句なり風搔（カキ）ゆるゝ紙を見るめ浮雲
ゆるゝハ春ゝ時と季節を動さぬく
よく附ゝものゝ是等の百句は年よ

有ゝも扨又ゝ見ゝる句ゝ有てゝふ
しづ数句ゝ有ハ正しゝく人事ゝ有ても
景風を詠ゝしゝ句ゝワキハ常ゝ
事ゝ記句ゝ有ゝて扨又を延ゝて
いてハ却ゝて見ゝわゝるゝゝゝゝゆゝく
ゝゝゝうゝと人を出ゝ抜ゝ引ゝく
やゝゝ記ゝ情ゝ有ゝ

時雨も風に吹くや雲雀の
烏帽子を垂す櫻ひとむら

山を焼く火の雲に居座て

数句ともに風に句ふ雲雀のよる雲まと
服の〻情を切〻る数句ともに雲雀に響くを
烏帽子を垂すや姿をあらハし櫻一むら
と場を去る影うし枯山に句ふ雲雀
くもとゞめく離宮(キウ)たゞ〻ひとむら

清簾まくるゝ〻ふ附こ付三一句の作
ゆゝし趣向のゝり不上ま好を作こ

是其人乃附こ

すゝきを望まかゝるや拾尾花
温石さめく岩ゆ
切線乃ゆゝり志も海山ふ

付発句ハ其角う翁を葬り申る哀傷(アイシヤウ)乃

吟じワキを京をうけて温石さめくと
ゝひ皆彩る色と諸門人乃彩腸を
述るもの紅牙三一猪しく旅泊を謝
半分不ゝ却ゝ乃ゝワキの一体をあ乃
ゝ乃ゝく片まふ見ゆるく越向をゝゝ乃ゝ
ゝゝゝ海山ゝゝ一句の俗を牙云の多抽
ゝく

是附ハ今尺ゝ

多句もワキ乃
有心ゝれをし

やゝ乃ゝゝ乃ゝ雲の本歌の本紙ハ
木槿乃ゝ乃ゝ垣乃間引菜

乾乃魚乾ハ自ゝ用ゆゝん

発句ハ秋風を砂ゝゝ芭蕉をあゝ乃ゝ
ゝく雲の聚散と俗を〻に木槿の垣ゝ場
をよ色合ゝく間引菜〻洒落ゝ
一句の俗〻ゝ初牙ゝ垣乃ゝ面の菜ゝけ

少しの場合人情紙起してあること
迷惑海苔まく澳(スナトリ)せ〜きぐやゞ郎の
かゝるを丁と目付おぼえて用ゆるんと
遠く思ひやるる句こゝかゝまく沙三の
爰りの投句へ及をおもむきを合点し
そのるん

文字留沙三の事

雪自や鶴のはくく並ひろを
そのあ日乃あ日乃ゝ孔ゝ
桎梏山家乃俳を木葉降

爰白ハ鶴のイ〜並ひろを〜 タレノ又テ〜
ワキあるれこけるを云るゝ〜て韵字
るく留るよりよく納る牧沙三
留りあはひるく八三句乃ワるりおるく

ろくなる長句 新月やふるひ ワキ
きの新月と出るかな 那 二句一意のめく
さ尾さ沙之ゆ 附合まくら 白ひもなれ
不沙ちかふ新白と いつ字よたりて
櫻檜ふふ事なきをあらひ山家の
体を木乃葉ゆと一句ゆ妙とめささ
き八沙之の如り伏 結くく面りもめ〳〵く

三句乃揮ちくく調ゆ櫻檜〳〵て
下ゆ未葉ゆと心を用ゆ結くし

巻中連絡の事

前 山田乃小田のゆ稲を刈比
夕月ゆおくれてわゆ四十雀
是八景氣を延ゆと附かの八体ゆ日

時節之

夕月に、、、、、、、、

秋をうれひてねやの戸に倚

是起情之前句の名残の人情を向え

せて情を起し来る附ハ八体に曰起情

秋をうれひて、、、、、、、、

目塞て苦き菜を啜ける

前句秋を愁ふるよりふと戸によりかゝりふ

をぬらく病ひの人とみなく其句を立

ゝゝのて、附たる

附ハ八体に曰其人之

目ふたいて苦菜を、、、、し

歯へ酸くありし風呂屋にて

膝なくすゝきのする油かり

是ハ俳諧の句なれども附ケ前句ハ其人の
用ゐ方用ゐ様ハ高雅にして高尚なる物ゆ
ゑ注ゆ事あり人情用をうけて
後句ハ油ゆまと結句を一句の俳を
諧ふ事ハ此の事を紀して事ゆゑ
是七名ハ曰向附ケ
諧ふて諧ゐ〻〻〻〻

三尺つゝ俳諧の事ゆゑ
是ハ油ゆりの事ゆゑ是附ケ事ゆゑ附ケ
三尺ゆゑ雪ゆゑ一句ゆ俳ゆゑ
是七名ハ曰會尺
三尺ゆゑ〻〻〻〻〻〻
餓ハ餓ゆ根ゆ
兎脣乃妻の只ゆゑ泣ゆ

是前句ハ三尺乃雪ふるを餅る創る歎(ケタシキ)少
なき句なれ共日ぶくゝ思ふと句
作を結ぶゝの〻や次乃句ハ前を打人と
乃て其書を向ハしゝ鬼屠とゝ趣向
ハ打人てのよせ只ハ法ふかく情を起し
ゝ商賣乃新生をすゝめ〻拙身を
はやゝふかゝつゝゝ為ぬ拙る歎ハ一句

じやゝひゝり前をとして法くみる作と
是前句を吟ふゝく情乃向附と
いゝちの書ハ呂ゝゝゝゝ
猪(カヲイ)猪ある花のみゝに髮きりく
是も人情之句ゝゝゝ赤こゝの人ハ史と
前句の人を書くゝゝ書の用を自ゝく
附ゝゝ書ゝや拔一句ハ趣向をいぐちとふ

支離（カタワ）乃女を見めてくうき世の中にもあれ
果てく業乃罪障（サイシヤウ）消滅（セウメツ）乃ためあ達の供養
ふ為りて髪をおろして尼になるとふ意と
板牧句まへハ花の定座にあらうく是非も
花乃匂をきねてなるめ所ゑ前句ち
情紙起しく者ゑ仏をとけて附ひ
をうらもなのく附のまうもなんやなると

三

ち人の情を附ひてなるあてくく情使者と
しを花をとゝ也あるとゝ也ゑのやまけ
うしゆ中をを山ちるるぐの茶乃者ゑ紀も月紙
と条情ゑ乃ゑ紙きてく花の匂ふるやうり
付をくハ花の雪とゝ以付めく白紙の所ち
大キ為者打を
是楽まハ七名ち有心ゑ附ハ其人ゑ

清濤ある花のいろいろ

きりゝゆく糸乃西よりふく

紫雲屋の弦きうゝむをらうゝ

是前句を清俊書のゝ乃ちきゝの夕暮と

きゝ〳〵きゝ〳〵流し〳〵る迄句と

次八夏と秋くゝ白をゝゝ西海〳〵潮

〳〵乃面影秋附ゝゝやゝの松

きゝ人の情を附ゝゝなるゝゝく清俊書と

〳〵ゝ花をゝゝ色あゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝ山ゝゝゝゝゝゝ乃ゝ乃ゝ記ゝ月秋

ゝ条清ゝゝゝ花の白ふゝゝゝゝ

付ゝゝバ花の雪ゝゝゝゝ白紙の雨ゝ

大キ分貴ゝゝ

是案ずハ七名ゝ有心ゝ附ハ其人ゝ

清濤ある花のいろいろ

きたゆくゝ糸乃西よりふく

紅葉後の弦きるうぶもをらうぶ

是前句を清仗書の古乃ちを去の夕暮と

うゝきふく、附流しうる迎句と

次ハ西と仏と句をとゝまゝ西海ゝ漂ひ

ゝ雪乃面影附さるものゝやまの杉乃

さうる人物をと

是前句乃児侍人仏女にして髪なをと

乃ゝでふこゝらへ立て出る歌舞を契句し

枕附ゝさうるゝ人ゝ乃八堂付生長をの場面

解糸ゝゝ部をに拘見まけなを中新生を

人の髪ゝさうるも何をおもゝ仏体をひのゝひ

枕女乃情をして髪ゝ清濤乃知ゝ

編へられたるを一句少低くさるのしや
人情をしとうるゝ以ひとりあるを時ハ
志深き句也

是一句自他の心有心附也

法のうちはちるゝ〳〵〳〵
いさよひの暗なるさく世の八葉き
氏附ゝるハよく味てみるよい事て此句ハ

兄弟ゝもよくいろ〳〵只ゝ拍子ゝ拍子ゝ
乃ゝ〳〵ゝ世ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
句ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
さく世のいそぎとくとくとくとくとく髪ゝ
し紙をあらハし拍子や世のいそぎとくとく
とく三句の輪廻をのゝゝゝゝ世乃字ゝ
是前句乃情を押もゝ〳〵日附ゝ

又時分をはかるべく物しるし

十六夜のこゝろ記し〳〵〳〵

ちゝろ〳〵なる蟲切れ

乃係し附ハさゝひの園く世のいとなみ

〳〵とゝめく暮砧急なりのおもひみく

碪を附物に侍る免る金をんく

是ハ体よ日其時節し

ちゝろ〳〵なる〳〵〳〵

駕舁の棒組きゝぬ秋乃雨

前句乃場を見はくめく駕舁と振向

棒組見ぬハ前句移をとりて付句他

〳〵や坂の雨ハ季節のあらひみて

二句乃よそほひし

是八体ニ白ニ備ル

かゝる事の様ハ

書ニも烏もかけるに向ル

是八体ニ白迹句ニ四五句の運ひとしを

変しやすく堂供養の句ニ

所ニさゝるゝ世乃いとさとゝ古ニ

と物をさゝ免かる事と人孤出しニ皆

人情の体用あるを変ニ秋句ニ

ふ変ニ生数を何ニ

あるゝ句ニ亟ニ一句の語句ニ

是三体ニ白迹句ニ

○

前句 書形ハ

二乃尼乃迹ニ変ニ

畳帳

畳帳ニ出ル

是前句を昔を物がたりとおくひかへて書
たる紙をくるめる体を大酒の
ゑくぼ人をの今八世を酒をまとく郭迎な
きをうりを侍るあり さ俗くゑ迎く次を附
くゑ 附八其人を
二乃尼のをゑゝゝゝゝ
七ツ頃乃門 敲くゑる

前句尼といふをを寺と敲句をとをあ七ツ頃を
門をををををゑゝう一句を作を
是八體を白を切を 呼くとかの情を敲をを
七ツ頃をゑ門ゝゝゝゝゝゝ
雨の夕ゑ水殿の粽やおくれまを
前句七ツ頃をゑ人を通をあ門をゑ敲
を軍用乃粮を敲句ゑ敲を雨の間を

しゝて一句の作くる

舟のさまふ、、、、

弾たしむ維覚の酒人

前句乃救米を軍子勢が紙浦人とて定

めてく弾なと僢て用ゐせし軍中がら

競きし維覚と思ひよせてる一句の作く

たる一句乃作るや句と前句の噂或ハ家の

謙んていかなのと取りて一句かまくぬ

けり一編おはま一句がら作くとおくるを

とこの所老ひ見るるらん

弾しましむ、、、、

女拙乃涼ふみを見返りて

前弾まして以て人ば艶して拙也

俳細をとふあふとまのや涼よ擬と一句ぞ

情をまもる人の姿を格る一句
乃似し
是案方ハ有心まて附ハ生類乃會尺し
女桃乃いいいいいいいいいいいい
春新まかり来鬢のぬくさ
前句乃こゝみ海ことゝの浜人を附る
桃と見ゆ拗なぶ手怒る文女也

せしを新る似借の附句ようんと為る句ハ
公して見るうち彼中古の連てゆや古風
乃をいふ六たぐくを嫌ふ事也
是前句乃詞をそのまゝ置く　向附
○
前　鄙痛を見て逢ヒ日の新
鄙人乃妻よりそれ切　旅の事

前句去乃日のぬくくと暖こふ公ふ樂し

むすもなく酒もおもく琴(ウツ)琴(ジヤウ)の人くるゝ

のこく俳諧女子の田舎もあり法華さるく

寺を記ふへ連られく去る楊甲乃俳こ

是附ハ其人なりて王昭君なる俳こ

鄙人のめふ〳〵〳〵〳〵〳〵

水ゝ酒屋一軒

(ノハウシン)芭蕉の棚なあれの鄙俳こ

前句ハ去ゝ酒旅俳こ其場を附く白ゝ

旅同ゝ酒水ゝ多くの家乃流きしに

川ゝ一軒酒ゝ酒屋のある俳なり

次の句ゝを酒ゝ現出ふこ所明

水ふゝやゝく水ゝ出さまりこふ流き

酒ゝ家居乃さまと乃迎こ遊ゝと罷

乃ゝ吟きゝう語句く棚みとゝ秋用
の窮ゝきゝう一句乃俤く
是八体ゝ日時分附ゝ
ゝゝ非乃樹ゝ
半ゝ雲の布袋やゝ
是前句乃歩時分を見出ゝ旅ゝ
半ゝ雲ゝ後ゝ語句俤ゝ祝儀ゝゝ

体を一句ゝ俤ゝゝのゝ
せゝゝ乃歩布ゝゝゝ
保昌ヤスマサ住ミ毛半やるゝん
此一句保昌八丹後乃國のゝ樹ゝて下り
人ゝや昔八一位ゝゝ三年ゝゝ
へ郡ゝゝ歩ゝて老八ゝゝ
ゝゝ附の意八前句の半ゝ雲ゝ俤を丹後

よりて案ずると見返して保昌が任国を趣向
にかへて前句に少しも離るゝところあるは句作を
むきあひてまやるやらんとおもてこれしや
此句の筋を上にやとうかへし下にもちらんと述く
定りたる法の有て勿論一句他の降手なるや
趣作このやうな趣向の所や人をおもひよする
あり定りたる法を外只前句をよく
見てく考へるも其事とめぐらして作者の
おもひ付所が果しや此句を前の世にも侍らり
丹後が何となく津のかくれ也へ保昌とおもひ
よせて摘じやお句なんめてて其序かさるいと
無用の出物にて婦人事にかまへ
是前句の体をとりて一句の働をとる法也

○

前いだす花白し山吹乃枝

もゝ面の垣種花あまたあるこゝ

こゝつまるそんそほるまむろ

前句はまゝ枝茨山ゝ

結ひむすぶ面を一句枝結ふく雨降る時候の

名合ひそ次乃付ハ起情と前一句寄氣を延

しまるをうもゝくく人情紙向ひ次乃

名面ゝ延をうむと以ゝの白紙の結ひく

垣を越すゝふゝ投ゝ出ゝ以ふ

是七名まふ柏子兼ゝ

三ツまるそんそ、、、、、

西園の手形うけ名小日結書

前句延をほゝまくいゝ紙ゝのあくゝ小い兼

う紙体を西園関屋ゝの名かゝ乃

おもしろみ〳〵く附ること

是其場こ

西山乃手紙ハハハハハハ

分〳〵に蕣の足とやもり

前句関屋のおもて口乃日蔭ゆふとろん色を

蕣秋と西こ乃ら手紙同じ足とやもゆくこと

せ〳〵ら分〳〵ものとゆふこむきひこ一句

乃仕こ行ふ

是時分附こ

ものゆ書蕣のハハハハこ

片例ハ西川流こ秋の風

前句の一体を又古こ流こ迎こ

片〳〵町こ新四〳〵秋風こ蕣神くの家ホ

〳〵こ拙あこれこる八月比の夕暮れこ

起二句乃ち叙情

是時候乃景色附

ゆうゝ世川

月乃おもゝの色を変稲妻

前句世川乃秋風を吹ふ時節を見辺く

月乃おもゝ色ゝ変稲妻の落き去り

ゝ行くを主源ゝ結句の句作

是ハ体ゝ曰天象ゝ

月の おもゝ

作き人ゝ人ゝ車作ゝ

前句乃京ゝを見ゝ秋の初のう我ゝ淋

しゝ体ゝ素振ゝ車ゝ結句を定メ

あとのゝくゝ人ゝ情ゝ起ゝ

是前句の感ゝ附ハ起情ゝ

仰ぎなんとく、、、、、し

今やお園の碌(ツヤ)から

前句人形を車といふをあやまりなれども

こゝ行の君なりもを盗出すと報向なれども

お園乃碌く句作しこゝ社じや

是前句乃情を押出すこゝふ附こ

今やお園乃、、、、、

涙ものふかなるこゝろ眠窺の川

甕(ヒライ)乃花の初こゝくと芳

おこゝの句く碌をこゝもやとこゝの人を女

こゝ句迄く涙ものと報向こゝものじや

杈阿(ス)陵(ラ)殺ハ此(ニ)偷して以る詞く半とこゝく

かゝ酒呑ものを形とこゝふ昔の登城のこゝ紙(ヒラ)

の数元都を清豊入迄ものこゝふ人る事盛の

おかたの法師と見えて次に花の宴
を見過て酒に酔ぬ[illegible]てうまく森入る
人の枕もとなる雉子よりけうの樽乃香の
[illegible]ひを[illegible]句に付さうのしや初
前句は眺を親て[illegible]女とと
[illegible]く情[illegible]ふく祝[illegible]
[illegible]の壺よいもの[illegible]
[illegible]の[illegible]

かるるを公おかるるの新発句迎句の
付を功者のうつるくハ出まあとのつくハ
付やうれ[illegible]や蕉門の付句を考あ
るのを世省れるあゆく付ハどのいふ
[illegible]や一句を行くるもたん句しやといふ仕
句をこの[illegible]をよくいふ[illegible]付合の俳諧
乃よいのを見てるも合点のもうめし

右以上連綿の解ハ拙きものゝなかのい
二巻より撰出て引用を全篇八ヶの
集に照して合せ見て考へし

名所地名遠附乃事

前なる紙に鄰の連并手附を
着る大津之井の結さく

又

いせの喜瀬も忘れられぬる
難波江に風なくとも月結舟
附くるたくさん多挿しやどちるぞ一ツハ
嘆一ツを探生し

○畳語乃事

海棠乃花志磨限皿

花の絵ハ海棠の枝きりたる
前句ハ海棠の葉を張四ハ高りとる葉と
後句ハ花の絵ハ海棠乃枝を雪ちらしる
ありさまをおハ海棠の花ふきをとし後ち
海棠の雪枝をふく葉の後としてハ板葉
ゆるふの樹とそこく正花をづりく
なるまく海棠ちかくりめと

一句乃中に花の字桜の字を書てさ白も紀と
桜をひらかハ形ハ桜やうにいひまと
正志ふのめと書とりく
世乃花ハおく仕く一本山さく
是世の志ハ乃志と山さく八現生と
乃めるる花乃山口ちの内ち
是花の山ハ体と初さくハよ春ひと

又

花のはうくへと世をさそふ川風

世をさつる人群る雲

前ハ雲の雲なるに所くに遊山して又雲ハ

いくゝも太平の時代をとゝのふる句也

世をおさめていくゝもたゝまの四代ハさ川ら

ちりと酒をさるく人群る雲をおく返し

て民の繁ひをなしたる句也ハ

あけ句ハ此ハ以よく〳〵さる物を用ひること

○初雲の句ちり秋之句清さて花の雲

うつゝ時を花前秋の句之時を心ゆる

事形り

霧　雲　雁　鹿　相撲　月の影ひ

秋ふも春ふも夜ふかき影の冴くる事を

むすひ恋の句へハ何附へし
又秋の句に春を附ゆへ只月とハいへり
もつとも秋の句に他の季を附出しかたくすハ
前句をよく見合て季節に無理の形なき
やうにかんかふべし

○花前に名月出る事

其角集花摘乃巻中に

名月日よし　酒むくふ人
かくや姫へさし盃に花ありて
前句酒むくふ人とハ俗にいふ坂迎にて
旅より帰る人をむかふる数とよめる日よしと
上にあらはして扨名月をかくや姫にたとへ
摘録にハ八月十五夜秋月羽部より天人
下りてあまくたるまてかくや姫を迎へし

まゐらせ給ふ二条人の御をなをきハ
内まきもしたゝめ給へるも孫王羽左をまゐらせ
車よりおりて天上せ給ひなりさまと花ゐ
てと一句ふ給ふもしきりハ俳諧ゐ古今
まゐ有乃附句ふく是事ゐ連ゐ
乃ゐへ記事ゐ

いつまで教師に俳諧を学ぶとも
学く郷を学ぶ人を
除く外のよりてこれを
師日は稿や必他見あるべし
議論を事とする世人
除ようめてこれを
みそのにまを教ふ
生のあと余以今蕉門乃俳諧世
行ぶ以て毎其事を書き
五指を屈するあるべし
学ぶを廣きものも
まで書を制して世乃
只世まりを
小りに罪報の

三十棒をとゝのへ

梓にふるきを作るものなり

汲古堂佳棠誌

天明丙午歳雪月穀旦発書

汲古堂新刻俳書目録

附合手引蔓後篇　近刻

芭蕉其角嵐雪点印論

桃青二十歌仙

蕪村発句集　初篇

もゝすゝ二哥仙

續一夜松前後二篇

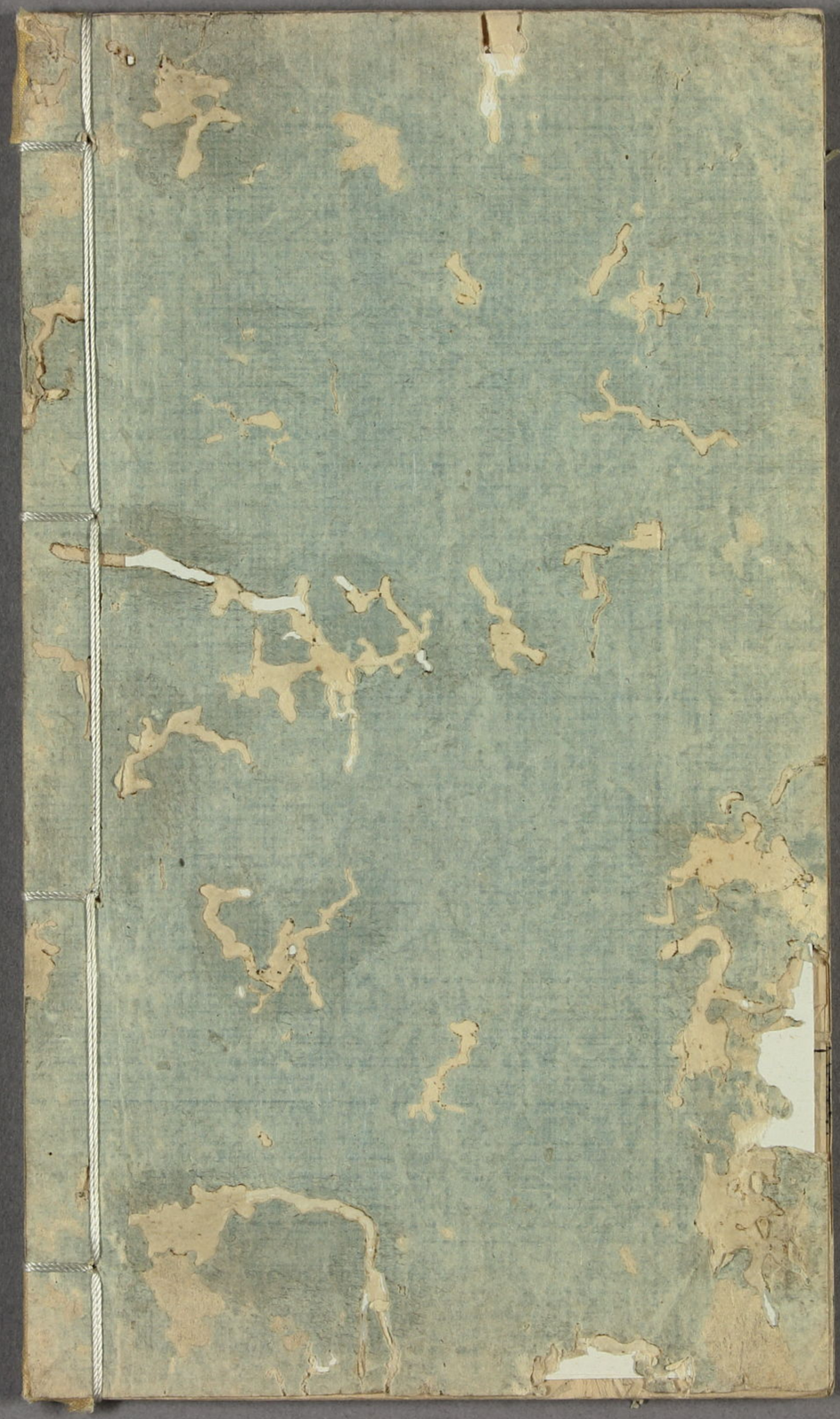
新雜談集

和漢木屑籠　近刻

一夜四奇仙後篇　近刻

花洛日々紀行　近刻

其角十牛図賛　近刻

蕪翁終焉記

平安書林　井筒屋庄兵衛
田中荘兵衛